

親鸞仏教センター通信

2007.
December

2007年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第24号

願われる存在

親鸞仏教センター研究員 羽 塚 高 照

二酸化炭素の排出による地球温暖化や化石燃料の枯渇という危機感から、トウモロコシやサトウキビなどの有機物を原料にしてつくられる「バイオ燃料」が注目されるようになって、はや久しい。確かに、バイオ燃料それ自体は大きな希望を抱かせてくれるものであるが、事態はそう単純には進んでくれないようである。

原料となる農作物は、需要が高まることにより、その価格が高騰し、より儲かるバイオ燃料に関する産業に流れるので、この状況が続けば、将来的には食料不足という事態も懸念されている。また、バイオ燃料の原料を生産するための焼畑により、アマゾンの森林が消失するスピードが近年アップしているという。背景には、それを高く買う先進国の存在がある。環境によいとされてきたバイオ燃料が、こともあろうに、さらなる環境破壊の一翼を担い、人間の存在を脅かしてしまっているのである。

私はここで、ひとりそしらぬ顔で、「人類は愚かだ」と断じようというのではない。目の前のほんのささいな事柄に過剰に反応し、心を奪われるにも関わらず、例えば地球環境など、大きな問題には無関心でいられる自分を否めない。そのような、「小我を捨てて大我に生きる」という仏教の教えに背くような生き方しかできないこの自分こそが、森に火を付ける張本人ではないのか。あるいは、たとえ一瞬でも立ち止まり、自分と自分を取り巻く状況に大きな矛盾を感じ得たとしても、しかしそれは、自分を突き動かしている大きな力の前で、まったく無力のまま立ち尽くすことでしかない。そのような自己嫌悪を、私はなんとかやり過ごす。幸い、気を紛らわしてくれるものは、私の周りに事欠かない。

だがしかし、「あなたは、それまでのあり方とはまったく違った新しい生き方ができる存在なのだ」と、仏によって願われているのも、他ならぬこの私ではないのか。もしそうならば、私は何をどう考えればいいのか。仏教の伝統は一貫して語りかけている。「あなたは欲望に突き動かされ、自我意識や所有欲に縛り付けられている。それが苦悩の根本原因なのだ」と。煩悩を完全になくすことは不可能だとしても、少なくとも、いま私たちは、自然環境の破壊などの「悪業」を犯しているということを自覚しなければならないのではないのか。たとえまたすぐに、自己嫌悪の底に沈んでしまおうとしても。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

人間本来のあり方とは何か

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第9回から第10回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第9回では「横超—真宗における超越とは」について、第10回では「光顔魏巍—釈迦仏の出世本懐」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第7回からその一部を紹介する。（研究員 羽塚高照）

■ 諸仏に護念される身になる

『無量寿経』（『大無量寿経』）を説き始めるその会座に集う菩薩方について語っている段に、「無量の諸仏、みな共に護念したまう」（『真宗聖典』5頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）という表現があります。果の位である無量の諸仏が、因位である菩薩のはたらきを「護念」するということです。だから、因果が相呼応しているわけです。

菩薩が生み出されるのは、仏を翼賛する、つまり仏をたすけ、ほめたたえるためだ、と曇鸞がおっしゃっています。仏に触れた存在である菩薩が仏をほめる。そのことで、仏のはたらきが衆生に伝わる。だから、あえて仏にならずに菩薩の位にとどまるという考え方もでてくるのです。弥勒菩薩は、一切衆生の苦悩が尽きるまで、菩薩の位にとどまります。親鸞聖人は、本願の信心の行者は弥勒と等しい、とまで言います。われわれは、仏には成れない。しかし、仏をほめる仕事ができ、仏の功德を伝える仕事ができる。その仕事の意味が弥勒菩薩だと、このように親鸞聖人は弥勒の名前をいただいています。本願を信じて念仏するところに、いま生き

ているこの生命が諸仏によって護念される身になる。念仏のはたらきのなかに、諸仏に護念されるという意味があるのです。これは、人間が苦悩から本当に脱出できることを具体的に教えている大事な方向性だと思います。人間は、時間的にも能力的にも、因縁という面でも有限です。そして「煩惱具足」で、たえず煩惱に突き動かされている。個人が閉鎖的になり、自分に苦しむ方向性になっていく。いま、「諸仏護念」ということが、「お前の行く方向は正しいよ」と護ってくださいという意味だとするならば、また、それを自分にいただくことができるならば、これは救いになるはずですよ。

確かに、現代社会は豊かで便利になりました。では、人間が本当に明るくなれたかといえは、決してそうではない。いっしょに生きている人びととの深い共感がないわけです。むしろ、ますます孤立化している。どれだけ便利になろうと、人間は人との関係を生きていますから、そこに明るみが見えないならば、それは「地獄」です。地獄では、他人の声が聞こえないそうですね。人間であれば、隣で苦しみを味わっている人がいたら、何らかの苦しみを感ずるということはあり得るわけですが、地獄では、どれだけ隣で苦しんでいる人がいても、お互いに相手の苦悩を知ることができないのです。

『無量寿経』には、「仏と仏と相念じたまえり」（『聖典』7頁）という表現があります。こういう関係は、人間にはほとんどつくれないのですが、もし成り立ったら、それは無上の意味をもつでしょう。人間の心には煩惱があって、恨みや妬みがくっついていきますから、相手のこ

とを本当に知ることはできません。しかし、それを破る方向に触れることで、あるいはそちら側の眼が与えられることで、人間は救われる方向に歩み出せる。覚^{さく}を開くとか、仏陀に成れるのだというのは理想です。そうはなれないことを正直に認めたのが親鸞聖人でしょう。人間は煩惱具足である。仏からの光を仰いで、仏の智慧のはたらきによって、こちらの眼の間違^{まちが}いが知らされていくしかない。そこに歩みがあって、仏から護^{まも}られているという感覚が与えられる。それが救いなのです。これが、この『無量寿経』が開いてくる方向性だと思います。

■ 涅槃からはじまる仏教

またこの段では、菩薩は「甚^{じん}深^{じん}の禅^{ぜん}慧^えをもつて衆^{しゆにん}人を開^{かい}導^{どう}す」（『聖典』5頁）と言われます。「禅慧」、すなわち、精神的な統一の世界から出てきた智慧を仏教は大切にします。精神統一された状況のなかで、この人生の大切さを見つめていって、なにがしかの体験をもつ。精神を統一していくことによって、本当の姿を見抜いていこうとする。そして、そこから智慧を開く。この智慧がないと意味がないわけです。禅定は沈黙の方向ですが、それが智慧となったときに言葉が生み出されてくるのです。そのような静けさから出た本当のはたらきが、仏教の特質だと思います。

また、仏教は、「涅槃」を抜きには成り立ちません。釈尊が涅槃に入ったということは亡くなったということですが、そこから本当のはたらきが出るのが、大乘の涅槃です。涅槃から仏法の真実性が明らかになるのです。大乘の涅槃は、「無^む住^{じゅう}処^{しよ}涅槃」と言われます。迷いの生死にも、涅槃にもとどまってはならない。だから、生きて迷っている世界から、単にさとり^{しやうじ}に往こうという発想ではないのです。

仏説は、お釈迦さまが亡くなって初めて記録されました。つまり、お釈迦さまが亡くなったところから、本当の仏教が伝えられてきたと言えるのではないのでしょうか。そこから、初めて弟子たちは自立し、本当の仏教が始まったのです。

親鸞聖人は、「釈迦^{しやかによらい}如来^{にょらい}かくれましまして二千余年になりたまう正^{しやう}像^{ざう}の二時はおわりにき如来^{にょらい}の遺^{ゆい}弟^{てい}悲^ひ泣^きせよ」（『正像末和讃』『聖典』500頁）と謳^{うた}います。釈尊の人格的保護のもとでの仏教は滅んだのだと。時代が大きく変化していくなかで、言葉も、考え方も、そして受け取られる感覚も変わっていく。仏の言葉を聞くということは、表現が難しいと思いますが、死んだ立場からの言葉を聞くことだ、と言ってもいいと思います。そういう眼が開けると、仏陀の言葉が聞こえてくるのだと思います。理性が求めるようなものではなく、人間の本来のあり方を——お前は何処に立っているのか、自分の生きている根拠を確かめなさい、と仏教は呼びかけるわけです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2007年12月 休 会
2008年 1月22日(火)午後6時30分～9時
2月20日(火) 同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

テキスト：「真宗聖典」大 ¥3,500・小 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

本多弘之所長の講演録

「親鸞思想の解明」が本になりました

本欄でも取り上げてきた「親鸞思想の解明」（全47回分：2001年11月から2006年8月までの講演記録）が、3巻本として樹心社から出版されました。

発行書籍

第1巻『浄土 その解体と再構築』

（2007年9月発行／序文：吉本隆明氏）

第2巻『浄土 その響きと言葉』

（同年10月発行／序文：芹沢俊介氏）

第3巻『浄土 大いなる場のはたらき』

（同年11月発行／序文：帯津良一氏）

価 格

各巻共に1冊2,600円

（送料・税別）

問い合わせと申し込み

樹心社

TEL 042-577-2778

FAX 042-577-2758



現代と親鸞の研究会・第25回

イスラーム教と現代の国際政治

国際日本文化研究センター准教授 池 内 恵



池内 恵氏

2007年1月31日、東京ガーデンパレス（文京区）において、国際日本文化研究センター准教授である池内恵氏をお迎えし、「現代と親鸞の研究会」を開催した。イスラームをめぐるさまざまな問題が、一面的かつ断片的な情報しか伝えられていない現状のなかで、直面している問題の解決には「そもそもイスラームとは何か」という全体像を総合的に把握する必要がある、と主張される池内氏に、「イスラーム教と現代の国際政治」について語っていただいた。ここにその一部を紹介する。

（囑託研究員 本多雅人）

■ 神の言葉としての『コーラン』

イスラームの問題は、宗教学や政治学や社会学などあらゆる分野に関係していて、一人の人間が一生をかけても、とても取り組めない問題です。また、イスラーム教について議論する際には、主観的な信念と客観的な認識とを切り分けることがなかなか難しい。宗教を相対化し、批判することがイスラーム教の歴史では行なわれていないからです。われわれが考えるような宗教的自由というものは、イスラーム世界にはありません。イスラーム教の観点から言えば、イスラーム教を信じる権利を行使することが一番の自由であると考えerわけです。逆に言えば、信者にはイスラーム教をやめるということはありません。

イスラーム教は、政治と切り離しにくい。さらには、異教徒との権力関係が教義に分ち難

く存在する。イスラーム法学の根拠としては、『コーラン』(Qur'^{さかのぼ}ān)に遡る宗教的規範の典拠があり、そこに基づいた規範と法が根底にあるために、イスラーム教徒と異教徒との関係はそう簡単に、宗教から自由に解釈することはできないということになるわけです。

『コーラン』が神の言葉であって、それは神からムハンマド (Muhammad) を通じて地上に下された、最後の啓示である。これはイスラーム教徒にとって、信念に基づく真実というだけではなくて、「事実」なのです。『コーラン』が「啓示」であるために、『コーラン』の一つひとつの文言が典拠となります。そして、その『コーラン』の文言を補助するとされる『ハディース』(hadīth)、これはムハンマドの話した言葉、あるいは行なった事績を書き記した書物群ですが、これがまた典拠となります。『コーラン』と『ハディース』にある文言を解釈することによって、現代の問題もすべて解釈できるとされ、実際に導き出しているわけです。基本的には一人ひとりの信者が『コーラン』と『ハディース』に立ち返って、常に現在の問題を判断するわけです。『コーラン』に基づく「啓示法」は、近代国家の「人定法」より上位にあります。

■ ウンマの概念

そして、『コーラン』や『ハディース』には、イスラーム教徒の集団対異教徒の集団の関係が宗教思想上、非常に確固とした形で定められている。イスラーム教徒の側では、自らを「ウンマ」(umma)と認識しています。これはアラビア語ですが、翻訳が難しいのです。意

味としては、「宗教政治共同体」と考えるしかないと思うのです。その場合の宗教政治共同体というのは、信仰を同じくする不特定の者たちが帰属していると共通して考えている実体、ということになります。

ウンマへの帰属意識によって考えれば、イスラーム教徒と異教徒という二分節によって世界は成り立っている、と認識されます。まずそこが重要です。近代的な宗教観からすると、宗教によって人間を分け隔てするのは、ある意味でよくないのではないかという考えがあるわけですが、イスラーム教徒の側から言えば、人間の根本的な属性というのは宗教であって、イスラーム教徒であるかないかというのは、人間の属性としての最初の出発点であると、当然のように信じられています。これは、大多数のイスラーム教徒が共通して認識しています。

イスラーム教徒にとっては、『コーラン』において正しいとされた行動を行なうことが義務であり、権利となるのです。「ジハード」(聖戦)の思想もその文脈で存在します。イスラーム教団の発展のなかで異教徒を打ち負かしてきた歴史、それは正しい歴史であって、なんら批判されるべきものではないといまも教えられます。ジハードの過程で下された『コーラン』の文言には、かなり攻撃的なものがあるのですが、それも正しいとされます。

■ イスラームとの対話

イスラーム教をめぐる紛争と摩擦というのは、国と国同士の関係というよりは、イスラーム教徒のウンマと異教徒の集団との対立という構図のなかで問題が生じてくるということです。確かに、近代における欧米の植民地主義、パレスチナ問題、湾岸戦争や9.11事件も、信徒の目にはこれに合致するように見えます。イスラーム教の宗教的な理念のなかに、単にイスラーム教徒の生活のあり方を規定しているだけではなくて、異教徒との関係、政治的あるいは軍事的支配といった環境を含む理念がある。このことが問題の重要な要因になっていることから、目を逸らしてはいけません。

いわゆる「グローバル化」と言われている現在の状況から見ると、ある意味で、イスラーム教のこのようなあり方が、非常に適合的な状態になっていると言えるのではないのでしょうか。つまり、国と国との関係が、世界のなかでの関係の主軸になるというよりも、むしろそれ以外の個人が行き交い、民族以外の理念で国境を超えて結合する時代になってくると、イスラーム教のあり方はこれに適合していたということになるわけです。そのなかで、ウンマの自己意識も再創造されていると考えるべきです。

結局、イスラーム教徒の側からは宗教と政治を分けにくい。ですから、宗教集団間の関係としての政治的な妥協を行ない、宗教的な解釈では、お互いに対立しない議論の方法、対処の仕方を見いだしていくということが、イスラーム教をめぐるさまざまな摩擦を回避していくために、大変必要なことではないかと思えます。

(文責：親鸞仏教センター)

※池内恵氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第15号(2008年6月1日号)に掲載予定です。

池内 恵(いけうち さとし) 国際日本文化研究センター准教授

1973年、東京都に生まれる。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。専攻はイスラーム政治思想史、中東地域研究。2001年、日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員を経て、現職。著書に『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』(講談社現代新書、第2回大佛次郎論壇賞)、『アラブ政治の今を読む』(中央公論新社)、『書物の運命』(文藝春秋、第5回毎日書評賞)、共著に『民族主義とイスラーム』(アジア経済研究所)など多数。



「現代と親鸞の研究会」(文京区の「東京ガーデンパレス」で)

テーマ別研究交流会報告[3] ///

—孤独・孤立を乗り越えるために—

コミュニティの観点から
現代の人間観を考える

親鸞仏教センター研究員 嵩 海 史

「テーマ別研究交流会」では、講師と親鸞仏教センター研究員が現代に生起するさまざまな課題や問題を共有しつつ、対話を重ね、交流していくことを目的としている。

今年度は、テーマに「現代社会における孤独」を掲げ、2007年2月19日には、文京区の東京ガーデンパレスにおいて、千葉大学法経学部教授の広井良典氏を講師にお迎えし、研究交流会を開催した。広井氏は、社会保障や環境、医療に関する政策研究から、時間、ケア等の主題をめぐる哲学的な考察まで、幅広い分野で研究活動をされている。

当日は、「持続可能な福祉社会とスピリチュアリティ——現代日本におけるコミュニティの諸問題——」と題して、まず「孤独」「孤立」をコミュニティの視点から社会的に押さえられ、現代の日本社会についてお話をいただいた。

■ 二つの対立軸

広井氏は、これからの日本社会を考えるうえで、二つの対立軸を提示された。

第一の対立軸は社会保障です。よく、「大きな政府」と「小さな政府」という話を耳にします。それは高福祉・高負担型の社会か、低福祉・低負担型の社会かについての話です。つまり、税金などの負担が、ある程度高くてもいいから福祉とか社会保障が充実した社会を目指す、ある意味で、より平等思考の社会を目指すのか。それとも、できるだけ税金といった負担は小さくし、その分、国の福祉や公の福祉は小さくてもいいから自分のことは自分で守るという意味で、自由に軸足を置いた社会のあり方を目指すのか。そういう「大きな政府」か「小さな政府」という対立軸があると



広井 良典(ひろい よしのり) 千葉大学法経学部教授

1961年、岡山県に生まれる。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。専攻は、医療経済・社会保障論・科学哲学。86年厚生省(現・厚生労働省)に入省。96年千葉大学法経学部助教授、2003年から現職。93年、「アメリカの医療政策と日本」(顕草書房)で吉村賞を、2000年、「日本の社会保障」(岩波新書)でエコノミスト賞を受賞。その他、「定常型社会」(岩波新書)など多数。

思います。

さらに、

もう一つの対立軸は、「成長志向」対「環境志向」です。第一の対立軸が、富を人びとの間で、どう分け合うのが望ましいのかという話であったとすれば、その富、経済そのものについて、限りなく成長を目指すという方向を選ぶのか。それとも経済成長というのはそこそこでいいから、別の豊かさを考えていってもいいのではないのか。環境志向・定常志向という方向を選ぶかという対立軸です。最近ではこの対立軸も、かなり重要なものとして浮かび上がってきています。

さかのぼれば、1972年に『成長の限界』という報告書が出されました。要するに、物質的な限りない成長という発想をどこかで変えていかなくてはいけない。これまでの対立は、だいたい成長志向という点では共通していましたが、その考え方自体を見直していくべきではないかということで、環境志向に重点が移ってきました。そうなる
と、「大きな政府」と「小さな政府」という対立軸もむしろ狭まるようなかたちになり、大きな政府でも小さな政府でもない、しかも環境とも調和し持続していけるような社会、そういう意味で「持続可能な福祉社会」、経済成長を絶対的な目標としなくても十分な豊かさが実現されていく、「定常型社会」とでも呼べるような社会をどう構想していけるのか。そろそろ市場経済が定常化・フラットになって、それを超える領域が大きく発展していく時代になっています。

そのようなことで、そういうものに対する担い手として、コミュニティや福祉・宗教といったものが、再び新しいかたちで問われてきています。ここで新しいというのは、古い共同体はどちらかといえば個人が自由に独立して動くというのではなく、共同体の力が強い社会でした。しかし、新しいコミュニティは、あくまで個人がベースとなりながら、自発的にいろいろなつながりを作っていく、NPO などに見られるあり方です。

と分析される。

二つの対立軸から社会の姿を押さえていくと、「定常型社会」というあり方が、現代において切実に求められている。そうした社会では、生活の豊かさは、コミュニティの領域と関係して捉えられると広井氏はおっしゃる。従来

の物的豊かさからの転換を、コミュニティから論じる広井氏の主張は、極めて重要だと思われる。

■ 再浮上する死生観のあり方

また広井氏は、現代人はコミュニティや自然、スピリチュアリティから切り離されていると指摘し、コミュニティを支える要素として、お寺や森などを挙げられた。

最後に広井氏は、

いまの社会は、端的に言えば、生きて死ぬことの意味が見えない状況にあります。成長の時代には、死をあまり考えてきませんでした。とにかく生を豊かに、経済を豊かにするという方向で来ました。そこに、忘れられてきたものがあるのではないのでしょうか。つまり、死生観のあり方と、経済社会の状況とは非常に関係があり、これまでの経済成長の時代は、死が脇に迫られていました。それが定常型社会になっていくなかで、これまで十分に見つめられていなかった死生観が、もう一度浮かび上がってきていると言えます。逆に言えば、いまの日本は、この死生観の空洞化という言葉が当てはまるほど、ある意味では非常に深刻な状況になっているように私自身は感じております。

と、死生観の重要性を強調された。そして、現代の私たちの生活において、コミュニティの重要性、さらにはその観点から、死を含めて現代の人間観を考えていく視座を語られた。

このようなコミュニティから要請される人間観と仏教の人間観をどうつないでいくか、今後、この課題を大切に考えていきたい。

※広井良典氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第14号（2008年3月1日号）に掲載予定です。

親鸞仏教センター研究員と読む——公開輪読会2007

「いま新たに聞く—釈尊・法然・清沢満之の世界」 参加者募集中!

2007年度の公開輪読会を下記のとおり開催します。当センターの研究員といっしょに仏教の『聖典』をひもとき、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思います。初めての方も、どうぞご参加ください。

■釈尊——^{さい}犀の角のように (全4回)

釈尊は、何を弟子たちに語りかけたのか。そして、それは現代を生きる私たちにどのような意味をもちうるのか。パブリ語で書かれた、最古の經典のひとつと言われる『スッタニパータ』を読んでいく。

テーマ：『スッタニパータ』を読む

日 時：2007年11月28日(水)
12月5日(水)、12日(水)、19日(水)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：羽塚高照研究員 資料代：500円 (4回分)



■清沢満之——宗教の哲学 (全4回)

明治の仏教者・清沢満之の思想を深く理解するには、その哲学の基礎づけからしっかりと確認しておく必要がある。今回は、いわゆる後期の「精神主義」へと展開していく、前期の思想の核をなす『宗教哲学骸骨』を読み進めていく。

テーマ：『宗教哲学骸骨』を読む

日 時：2008年1月9日(水)、16日(水)
23日(水)、30日(水)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：山本伸裕研究員 資料代：500円 (4回分)



■法然——念仏ひとつ (全4回)

昨年度に続き、『選択本願念仏集』を読み進める。本年度は、先学によって『選択集』の中心の章と指摘される第三章に入る。「念仏ひとつ」、すなわち「なぜ、称名念仏で救われるのか」、法然が明らかにした念仏の世界を尋ねていく。

テーマ：『選択本願念仏集』を読む

日 時：2008年3月5日(水)、12日(水)
19日(水)、26日(水)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：嵩 海史研究員 資料代：500円 (4回分)



■申し込みと問い合わせ

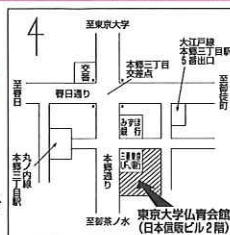
参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願います。定員35名。連続12回の講座ですが、途中からの参加も受け付けます。

公開輪読会2007 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

■会 場

東京大学仏青会館2階ホール
(文京区本郷三丁目・日本信販ビル2階)



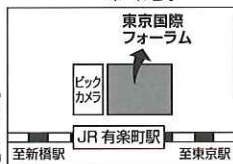
東京メトロ丸ノ内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分

公開講演会2007のご案内

- ①テーマ いのちの不思議—科学と宗教の生命観
②日 時 2007年12月14日(金)
午後6時30分～9時30分(受付：午後6時)
③講 師 清水博氏 (NPO法人「場の研究所」所長・東京大学名誉教授)
本多弘之 (親鸞仏教センター所長・大谷大学大学院講師)
④聴講料 無料
⑤定 員 200名(先着順)
⑥後 援 大谷大学
⑦問い合わせ 東京国際フォーラム
ホールD5

公開講演会2007 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp



武田定光元囑託研究員が

『歎異抄の深淵—異義篇』を出版

当センター元囑託研究員の武田定光氏が、『歎異抄の深淵—師訓篇』(本紙第19号で紹介)の続編となる『歎異抄の深淵—異義篇』を出版しました。

お求めは、雲母(きらら)書房(TEL03-5331-3343)まで。



親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円(送料込)で、情報誌「アンジャリ」(年2回)と機関紙「親鸞仏教センター通信」(年4回)をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

申し込みと問い合わせは、親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係 (TEL 03-3814-4900) まで。

会員
募集中!

あ と が き

今年9月、情報化時代における漢字使用の意識を中心とした、2006年度「国語に関する世論調査」(16歳以上、約2000人の面接)結果が文化庁から発表された。「書けない漢字は何で調べますか?」(複数回答可)との問いに、20代の約8割の若者が、「携帯電話の漢字変換機能を利用する」と答え、10代や30代でも6割を超えている。ちなみに「辞書(電子辞書)を使う」は全体で60.6%に対して、10代で30.4%、20代で35.4%と低い。さらに、「憂鬱」の「鬱」は手書きだと78.9%の人が仮名で書くのに対して、情報機器では71.5%の人が漢字で書いており、携帯などの普及が漢字の多用に拍車をかけているのがわかる(朝日新聞)。もはや、「携帯電話は単なる通信手段だけでなく、辞書として「文字生活」に入り込んでいる」(毎日新聞)ことがわかる▼一方、生活を便利にした携帯が、使

い方によってはいのちを奪う道具にもなる。去る10月、川崎市で起きた「自殺サイト囑託殺人事件」は、自死をねがう女性が、掲示板を開読した見ず知らずの人に自殺をほう助してもらった、これまで考えられなかった事件である。死に急ぐ人と自殺をほう助する人が、ケータイでつながっていたとは……。いま、利便性追求の社会にあって、「何に依って、人と人の絆を構築していくのか」が切実に問われている▼今年度も、当センター研究員と読む「公開輪読会2007」を開催することとなった。これまで連続参加の会員は、「日々、超ハードな生活に追われるからこそ、自分を見つめる時間は確保したい」と語られる。まさに、釈尊2500年、法然800年、清沢満之100年の時空を超えて、人間の苦悩の根っこを頭かし、真実の教えに開かれる人間関係が、いま求められているように思う。(長谷岡)